

校長室だより

☆教育目標☆

自ら考え判断し、進んで行動できる富中生
＜生活心得＞ 時を守り 場を清め 礼を正す
令和元年10月25日発行 No.13
富岡市立富岡中学校 校長 中村 喜雄

☆☆四つの目…☆☆

今回は、“子どもを見る目”について考えてみたいと思います。一人一人の子どもを理解するために必要不可欠なものとして、教師は“四つの目”をもたなくてはならないと言われています。このことは、親にも当てはまることですので、紹介させていただきます。

まず一番目にあげられるのは、“肉眼の目”。子どもの姿をそのまま見る目で、例えば、今日のA君の顔色が悪いとか、BさんとCさんがひそひそ話をしていた、D君が自主勉強をノートに5ページやって提出した等、見える状態をそのまま見る見方です。誰でも普段行っている見方ですが、教師はいろいろなところに目配りして、一人一人の姿を的確にキャッチしなければなりません。

二番目は、“透視の目”。これは、子どもの言動の陰にある真意とか心の中にあるものを見通し感知する目です。顔色が悪い原因は朝食抜きのためなのか、家庭で何かあったのか、交友関係がもつれたのか、「一人でいるのが好き」という子どもの言葉の奥にある本当の気持ちは何なのか等を見通す目です。これは教師として一番求められる目で、普段から鍛えておく必要があります。

次に、“拡大の目”。これは、小さな変容を見逃さず、その子の個性やよさの伸長を後押ししたり、評価・賞賛を与えたりする目です。同時に、もし問題点があれば、その原因を浮き彫りにして解決することができる目でもあります。心を働かすことが少なかった自問清掃に気働きが増えてきたとか、読書傾向に変化が出てきたとか、集中力が今ひとつだった子が作品作りや学習に熱心に粘り強く取り組めるようになってきたとか、集団の中での自分の立場を自覚した言動になってきたとか等を認識する目です。

そして、最後が“時間の目”。これは、目先のことばかりではなく、長期的なものの見方ができる目です。子どもが失敗しても、何かトラブルを起こしても、それらは今後の人生において生きて働く大事な体験となるということを認識する目です。また、歴史的事実から学んだり体験を生かした指導ができたりする目もあります。ずっと先を見通す長期的な視野に立って子どもを見守り育てることができる目。こんな目を常にもっていかなければなりません。

この“四つの目”を磨きながら、教師・保護者が共に子どもたちの成長を見守っていくことが大事だと考えます。



